

沖縄地理学会会報●第 57 号



2013 年 5 月 20 日発行

編集・発行 沖縄地理学会 © 発行人 前門 晃
OKINAWA GEOGRAPHICAL SOCIETY (OGS)

事務局 〒903-0213 沖縄県中頭郡西原町字千原 1 番地
琉球大学法文学部地理学教室内 廣瀬 孝研究室気付

電話 098-895-8191

<http://www.cc.u-ryukyu.ac.jp/~chiry211/>

振込口座 02040-4-4697

沖縄地理学会創立 30 周年記念シンポジウム(報告)

全体テーマは「沖縄における地理学の成果と課題」

2012 年 12 月 8 日(土)午後 12 時 50 分から、沖縄国際大学 5 号館 107 教室を会場に、今年度で創立 30 周年を迎える本学会の記念事業として、沖縄地理学会創立 30 周年記念シンポジウム(立正地理学会沖縄例会との共催)が開催された。シンポジウムの全体テーマは「沖縄における地理学の成果と課題」であった。前門 晃沖縄地理学会会長ならびに山中 進立正地理学会会長のあいさつのあと、堂前亮平会員(久留米大学)による「沖縄における人文地理学の歩み」という論題で基調講演が行われた。そのあと、廣瀬孝会員(琉球大学)、小川 護会員(沖縄国際大学)の司会でシンポジウムに入った。シンポジウム報告およびコメンテータは次のとおりである。

1. GIS: 渡邊康志会員(GIS 沖縄研究室):「GIS を使った沖縄情報の発信——沖縄国際大学講義『基地と自然環境』」。コメンテータは鈴木厚志氏(立正大学)。

2. 自然地理学: 前門 晃会長(琉球大学):「沖縄地理学会 30 年の歩みにみる自然地理学研究」、島津 弘氏(立正大学):「沿岸の巨岩からみた沖縄の自然——なぜ沖縄の沿岸には巨大な岩が

あるのか?」。コメンテータは尾方隆幸会員(琉球大学)。

3. 人文地理学: 宮内久光会員(琉球大学):「沖縄県内における離島研究の動向と展望」。コメンテータは上江洲 薫会員(沖縄国際大学)。

なお、基調講演、パネリスト報告およびコメント等は、別項(p. 3~8)のとおりである。

パネリスト報告後の総合討論においてもフロアーからの意見、質問を交えて活発な議論がなされた。最終的に、参加者はおよそ 130 人を数え、30 周年記念事業にふさわしい行事として、盛会のうちに幕を閉じることができた。

シンポジウム終了後、5 号館屋上にて、普天間基地とオスプレイ、および現在はモニュメントになっている、2004 年 8 月 13 日に沖国大キャンパスに落ちた海兵隊ヘリコプター墜落現場を見学した。

夕方 18 時から「ばいかじ沖国大前店」(沖縄料理)にて、懇親会が開催され、沖縄地理学会ならびに立正地理学会会員相互の親睦が図られた。参加者 27 人。

(文責: 小川 護)



〔左〕パネリスト。左から渡邊康志氏・前門 晃氏・島津 弘氏・宮内久光氏・堂前亮平氏 / 〔中央〕基調講演をする堂前氏
〔右〕質疑討論で意見を述べる島袋伸三氏(琉球大学名誉教授) (撮影:編集子)



〔左上〕上江洲 薫氏 / 〔左下〕尾方隆幸氏 / 〔右〕意見を述べる中村倫子氏(会員)と仲田邦彦氏(同) (撮影:編集子)



シンポジウム終了後の記念撮影 (撮影:小川 護)

沖縄地理学会創立 30 周年記念シンポジウム(講演要旨／コメント)

●基調講演

沖縄における人文地理学の歩み

堂前 亮平 (久留米大学)

I はじめに

本講演は、沖縄に関わる事象を研究対象とした人文地理学(地誌学を含む)の歩みを概観するものである。歴史的に4つの時期に分けられる。すなわち、1)第二次世界大戦前、2)戦後、日本復帰(1972年)まで、3)日本復帰(1972年)から10年、4)沖縄地理学会発足(1982年)から現在までである。

II 沖縄における人文地理学の歩み

1) 第二次世界大戦前

第二次世界大戦前の沖縄を研究対象地域とした人文地理学は昭和の前期に開花する。主な研究として、武見芳二(1928)「沖縄島出移民の経済地理学的考察」、赤嶺康成(1939)「沖縄島の含密糖について」、富田芳郎(1939)「沖縄諸島の地理学的特質」、高原三郎(1939)「沖縄県下の集落」、仲松弥秀(1942)「琉球列島におけるマラリア病の地理学的研究」、などがあげられる。これらの研究テーマは現在においてもより深化して研究が進められているものである。

このような系統地理学に先立ち、地誌学として山崎直方・佐藤伝蔵編『大日本地誌』(10巻・明治36年~大正4年)が刊行され、「琉球・台湾篇」は第10巻として1915年(大正4)に発行された。

2) 戦後、日本復帰(1972年)まで

1950年に琉球大学が設立され、社会科学部史学及地理学科(初代地理学科主任赤嶺康成教授)が設置された。このことは沖縄における地理学研究の礎となった。

1957年以降、伊藤郷平らの招聘教授の来沖があり、さらに1965年には日本地理学会が開催された。

この時代における人文地理学研究の主たるものとしては、琉球大学の教員(仲松弥秀、田里友哲)による村落研究があげられる。

3) 日本復帰(1972)から10年

日本復帰によって、沖縄県外の研究者による沖縄を対象とする研究も見られるようになったが、主力は琉球大学の地理学教員である。1975年に発行された青野壽郎・尾留川 正平編『日本地誌 21』の沖縄県についての記述は、琉球大学地理学教室のスタッフが総力をあげて書きあげたものである。

この時代の人文地理学研究で特筆すべきものは、石川友紀を中心として琉球大学法文学部地理学教室スタッフが関わった移民研究である。

また島嶼地域研究が中山 満らによって進められたほか、歴史地理学、文化地理学等の研究が沖縄県外の研究者によって行われた。

4) 沖縄地理学会発足(1982年)から現在まで

県内の研究者が増加するとともに、県外研究者による研究も活発化する中で、1982年8月28日に沖縄地理学会(会長田里友哲)が発足した。

沖縄を研究対象とした地理学研究の分野が多彩となり、かつ深化してきた。すなわち、経済地理学(花卉園芸農業、サトウキビ農業、農産物の生産、養殖モズク生産、情報通信産業)、観光地理学(観光開発)、人口地理学(島嶼の人口移動・人口変動)、島嶼地理学、都市地理学(米軍基地に関わる都市化・都市の社会空間)、村落地理学(基地と

村落), 社会地理学 (米軍基地, シマ社会, 郷友会, マラリア病), 交通地理学 (架橋, モノレール), 文化地理学 (屋敷囲い), 知覚・行動 (子どもの地域認識), 政治地理学, GIS, 地理教育などであり, とくに沖縄に関わるさまざまな社会現象に着目した研究が社会地理学の視点から行われるようになった。

地誌学においては, 2012 年に『日本の地誌 10 九州・沖縄』が発行された。日本の地域区分の中で, 沖縄はひとつの地域性を持つ地域を占めているという認識に立って, 九州と分離している。記述は動態地誌的である。

III 沖縄に関わる人文地理学研究の事例

1) 島嶼地域の歴史地理学

平岡昭利は近代における日本人の南島への進出をアホウドリとの関係において考察した。そのなかで, 尖閣諸島への日本人の進出や南北大東島やラサ島の開拓などを, 日本人が進出した島嶼との関連を通して論じている。

2) 沖縄に関わる社会空間の変容

筆者は, 川崎市における沖縄県出身者の社会空間が変容する過程を, 沖縄芸能を通して考察した。

●GIS

GIS を使った沖縄情報の発信

沖縄国際大学講義「基地と自然環境」

渡邊 康志 (GIS 沖縄研究室)

はじめに

普天間等の沖縄基地問題について, Twitter やブログ, 掲示板では活発な議論が行われており, 一般の方々も関心を示している問題である。これらは本土のマスコミでも取り扱うこともあるが, 短期的な取り扱いで沖縄との温度差がある。このような状況になる原因の一つには, 沖縄の現状を伝える数字や言葉が独り歩きし,

自分の身の回りに置き換えた空間情報として伝わっていないのではないかと考える。沖縄国際大学講義「基地と自然環境」において, 沖縄の現状を伝えるため, GIS データを多数作成し紹介しているが, 聴講生より初めて空間情報として伝わったとの感想をいただいている。今回のシンポジウムではこれらの情報発信を紹介する。

GIS の昨今

数年前まで, GIS 利用はコンピュータ操作や地図作成等に精通した技術者や研究者のツールであり, その利用による高度な解析やプレゼン能力は万人が認めるところであったが, その高額な運用費用もあって, 一般的な利用という点では問題があった。近年, インターネットサービスとしての GoogleMaps や 3DGISViewer として GoogleEarth が普及し, GIS を意識せず一般市民が空間情報を利用できる環境が整ってきた。また, これらの基盤を利用することで, GIS により作成した空間情報を容易に公開することも可能になった。

空間情報の公開

GoogleMaps/Earth が普及する以前, 空間情報を公開する方法としては, webGIS を利用する必要があった。この方法は, 専用ソフトやサーバー, 表示に必要なマップデータ全てを準備する必要があり, 技術的かつ費用面でのハードルが高く, 特別な機関だけが利用できる状態であった。

GoogleMaps/Earth の普及後は, 個人がホームページを作成するためにプロバイダーと契約することで運用できるレンタル web サーバーを準備することで, GoogleMaps/Earth を使った空間情報の公開が可能になった。ただし, 公開するための空間情報を作成するに当たっては, GIS 利用の知識やソフトなどは必要になるが, 情報発信ツールとしての魅力が, この知識の習得のモチベーションとなるものと考え

る。

「基地と自然環境」における GIS データ
紹介した GIS データは次の通り。

1. GoogleEarth を使った沖縄の米軍基地一覧
ツアー。
2. GoogleEarth を使って嘉手納基地と羽田空
港の比較、沖縄米軍基地を東京都に。
3. 大正時代の地形図に現在の住宅地を重ね合
わせ、消えた集落、移動した集落。
4. GoogleEarth を使って訓練空域はどのよう
に見える。

コメント 鈴木 厚志 (立正大学)

報告者の渡邊氏は、スタンドアローンからネ
ットワーク環境そしてインターネット環境へ
と、GIS を巡る環境変化を自ら実感してきた研
究者である。渡邊氏は、2007 年 5 月の「地理
空間情報活用推進基本法」成立以降に国土地理
院が刊行した「基盤地図情報」や、2012 年夏
から運用の始まった「電子国土基本図」を業務
や教育の場において積極的に活用し、かつ一般
ユーザーにもわかりやすい活用法の提案を継
続されている方である。

この度のシンポジウムにおいて、コメント者
の鈴木は以下の 3 点について質問を行った。第
一は、インターネット環境下において学生や市
民の利用する WebGIS を想定した場合、どのよ
うなテーマを題材とするのがよいのか。また、
参加度の強弱によるテーマ変更の有無である。
第二は、報告にあった「基地と自然環境」講義
以降、学生はどのようにテーマや WebGIS 利用
を発展させたのか。第三は、渡邊氏は日頃より
どのような点に配慮して地図表現をしている
のか。以上である。

これら 3 点について、いずれも適切な返答を
頂き、特に位置情報+デジタル地図+ネットワ
ークのもたらす相乗効果を、巧みに教育や市民
活動へ還元しようとする意欲とその実績は圧

巻であった。また、高額の施設や地理空間情報
を使用しなくても WebGIS の効果的活用によ
り、むしろ必要とする情報を的確に処理・表現
することを実証した報告は大変興味深いもの
であった。

●自然地理学

沖縄地理学会 30 年の歩みにみる

自然地理学研究

前門 晃 (琉球大学)

地理学・地理教育の進歩普及を目的に、沖縄
地理学会が 1982 年 8 月 28 日に創設された。今
年は学会創設から 30 年の節目の年となり、沖
縄地理学会が歩んできた 30 年の道のりをたど
って、自然地理学研究がどのように行われてき
たかを探ることは、これからの自然地理学研究
の方向性を考えていく上で、意義のあることだ
と思われる。

自然地理学研究は、学会の第 1 回大会 (1982
年 12 月 18 日) からその研究成果の発表が行われ、
第 31 回大会 (2012 年 7 月 28 日) まで途切れるこ
となく研究成果の発表が行われている。大会で
の研究発表の要旨が、「沖縄地理学会会報」に
まとめられ、「沖縄地理学会会報」は第 1 号 (1982
年 11 月 18 日) から第 56 号 (2012 年 6 月 29 日) ま
で発行されている。また、学会誌「沖縄地理」
が第 12 号 (2012 年 6 月 25 日) まで刊行され、毎
号に自然地理学研究の成果が公表されている。
2011 年には第 1 回の石灰岩地域シンポジウム
が行われ、石灰岩地域の特色・もち味、課題が
浮彫りにされつつある。研究の内容は、地形研
究が多いが、水文、気候、土壌に関する研究も
行われている。

学会設立 4 年後の 1986 年には、学会誌「沖
縄地理 第 1 号」が刊行され、会員の研究成果
が広く国内に公表されている。「沖縄地理」は
第 7 号までは不定期に刊行されたが、第 8 号か

ら査読制を導入し、毎年発行の学会誌へと更に深化が図られた。対象とする自然地理学事象は多岐にわたるが、地形プロセス、風化に関する研究成果が多くみられる。沖縄の地形の実態、分布、形成時期、形成要因、形成・変化速度が定量的に解明されてきている。

今後の課題として、若手研究者の育成、地形プロセス・風化研究の深化、水文・気候・土壌研究の充実・強化、研究成果情報の発信が挙げられる。

沿岸の巨岩からみた沖縄の自然

なぜ沖縄の沿岸には巨大な岩があるのか？

島津 弘（立正大学）

海岸段丘の上や崖の前面の海岸あるいは干潟や砂浜の上にある石灰岩の巨岩は、沖縄独特の景観をつくっている。これらの一部は古文書や伝承として残されている「津波石」である。津波石の多くは海底の完新世のサンゴ礁の一部が剥ぎ取られたもので、宮古、八重山諸島に数多く見られ、下地島の帯大石や石垣島の津波大石などがある。これらの巨岩は大きさが10 m前後と巨大なだけでなく、標高10 m前後の海岸段丘上にある場合もあり、津波の力の大きさがわかる。河名と中田の津波石の研究により1771（明和8）年の明和地震津波とそれ以前の8回の津波が襲来したことがわかっており、津波石は巨大海底地震の使者と言える。津波石以外の巨岩は海岸の崖が崩れてできた。小暮らの研究により、海面の高さ付近に波の侵食によって形成されたノッチと呼ばれるくさび状のくぼみに加え、崖と平行する割れ目の発達によって琉球石灰岩が剥げ落ち、崖の高さにみあった20 mを超える直方体状の巨岩がつくられることがわかった。しかし、宮古島では場所によって巨岩の大きさや形が異なり、崖の高さと巨岩の大きさには単純な関係がない。保良川ビーチ

の高さ約40 mの崖下には数m～15 m程度の不定形の巨岩があり、東平安名崎の高さ約20 mの崖の前面には巨岩は最大で30 m以上の直方体に近い形の巨岩がある。講演者らの研究により、このような違いは宮古島の地質構造と関係があることがわかった。宮古島では多孔質で水が簡単にしみ込む琉球石灰岩が、水がしみ込みにくく柔らかい堆積岩である島尻層群を不整合に覆っている。2つの層の境界の上面に地下水の層ができる。この水は崖に見られる境界から湧出する。保良ガーなどの湧水では軟らかい堆積岩が侵食されてノッチ状の地形が形成される。島尻層群の上の琉球石灰岩は不安定となって崩れる。保良川ビーチのように2層の境界が高いところにある場合は転がり落ちながら砕ける。東平安名崎では2つの層の境界は海面の少し上の高さにある。琉球石灰岩は剥がれるように崩れ、剥がれたときと同じ形で堆積する。琉球石灰岩の厚さと2つの層の境界の高さの場所ごとの違いが巨岩の多様性をつくり出す。このような地質構造は沖縄本島など沖縄に広く見られる。巨岩は台風時の暴浪や津波によって移動して沿岸の景観をつくり出す。沖縄沿岸の巨岩景観は、さまざまな沖縄の自然の姿の代弁者である。

コメント：尾方 隆幸（琉球大学）

前門報告にあるように、沖縄地理学会は、特に野外調査に基づく地形学的な研究で大きな成果を上げている。シミュレーションや室内実験と異なり、頻繁な観測が必要になる研究には、現場に近い研究者が有利である。今後も、地の利を活かしたフィールドワークの伝統を引き継いでいかなければならない。同時に、地形学分野に偏りがちであった研究テーマを他分野に広げる努力も求められよう。さらに、自然地理学研究のアウトリーチにも力を入れる必要がある。島津報告で取り上げられた海岸の巨礫

は、多様な地形形成営力がコンパクトに凝縮された景観要素といえる。こうした、いわば地形プロセス学の縮図の場合は、地形学を学ぶ良い野外教材になるだけでなく、景観の成り立ちを語る優秀なストーリーテラーでもある。特にプロセスの多様性を観察できるサイトの価値は高く、ジオパークや防災教育などの今日的トピックの素材として注目される。

●人文地理学

沖縄県内における離島研究の動向と展望

宮内 久光（琉球大学）

本報告は、沖縄県の離島を対象とした人文地理学研究のこれまでの動向を考察し、今後、どのような研究を行う必要があるのか、その方向性の一端を提示することを目的としている。

今回、この報告を行うにあたり、これまでに発表された沖縄県の離島を対象とした人文地理学研究論文のデータベースを作成した。データベースには、これまで 129 本の離島論文を登録することができた。現段階で、最も古い論文は、浮田典良が 1960 年に史林に発表した「沖縄久高島の土地制度」と思われる。

これらの離島論文を発表年ごとに論文数を集計した。1960 年以降 1970 年代前半までは、数年に 1 本程度の頻度で論文が発表されている。それが 1972 年の復帰以降、少しずつ離島論文が現れ始め、1982 年以降は毎年必ず発表されている。1982 年は沖縄地理学会が発足した年であり、地理学研究の基盤が整備されたことが研究成果につながっている。1980 年代後半から 1990 年までのバブル期、1990 年代後半のいわゆる沖縄ブームにのって、離島論文は右肩上がりに増えていく。そのピークが 2003 年であり、論文数は 10 を数えた。その後、沖縄ブームの終焉とともに論文数も減少し、リーマンショックの 2008 年には 1 本のみとなった。

2010 年代に入り、現在は毎年 2～3 本程度と安定している。このように、沖縄県の離島論文数の経年変化は、沖縄を取り巻く社会情勢に影響を受けていることがわかる。

次に、発表年代ごとにどのようなテーマで研究がなされているのかを見てみる。各論文を 10 の分野別に分類した。最も多く研究されたテーマは農業であり、31 本を数える。特に、1970 年代から 90 年代前半までは、サトウキビ農業に関する論文が多い。それが 90 年代後半以降は、葉タバコや花卉、肉用牛など離島農業の多角経営化を反映して、対象農産物も多様化していく。農業に次いで研究されたテーマは集落であり、80 年代に多く研究される。人口（15 本）、交通（12 本）、観光（10 本）と続く。これは日本の離島研究と同じ傾向であるが、沖縄離島は交通と観光の比率が相対的に高い。交通は架橋研究に特色が見られる。研究方法も全体的にフィールドをきちんと歩いて調べるタイプが多い。一方、島の理論研究や離島振興などの分野は研究例が少ない。

今後、沖縄の離島研究が、世界の島嶼研究の先導になるには「グローバルな視点」で、「今日的な島の課題と問題解決型の研究」が望まれる。

コメント：上江洲 薫（沖縄国際大学）

1. 沖縄県内における離島の研究は、1) 離島の産業や人口など、現状・特性などの地域性を明らかにする研究、2) 離島特有の課題を中心に明らかにする研究などに大別できると思われるが、地域性を明らかにする研究は多い一方で、課題を明らかにし、提言などを行う研究は少ないように感じられる。

2. 調査公害について

現在、沖縄県内の離島では、「調査公害」により調査を拒絶する地域や団体などがある。特に観光の研究ではその傾向がある。

毎年、大学の教員や学生などが多く離島に調査で訪れるが、調査結果を地元で報告しなかったり、還元しない場合もあるため、地域貢献を目的とした研究をしたくてもスムーズに調査が実施できない。私自身、類似する調査内容が多かったため、調査内容を変更した経験がある。したがって、今後は、離島の課題を克服しているような、沖縄県外の研究事例を、沖縄の離島

で報告会など開催して、情報提供や提言を行う必要があると思われる。これは私自身の課題でもある。逆に、地域に役立つ研究方法や情報提供の方法を教えて頂けると嬉しい。

参考文献：宮本常一・安溪遊地（2008）『調査されるという迷惑——フィールドに出る前に読んでおく本』、みずのわ出版。

2012 年度 第 1 回地理学巡検（報告）

2012 年度第 1 回沖縄地理学会巡検は、12 月 9 日（日）に、「久高島の祭祀空間と地域振興」をテーマに、立正地理学会臨地研究会との合同の形で実施された。

参加者は那覇市パレット久茂地前向かいのバス停で集合し、大型バスで 8 時 30 分前に出発した。安座真港には 9 時 30 分頃に到着。途中、八重瀬町の自衛隊基地周辺でバスを降りて、北朝鮮からの人工衛星（弾道ミサイル）の迎撃ミサイル（「pac3」）の配備状況を見ながら、久高島周辺が一望できる場所で休憩した。港に到着後は、午前 10 時発の「フェリーくだか」に乗り、徳仁港には 10 時 20 分に到着した。

島内巡検では、巡検講師の赤嶺政信氏（琉球大学）、久高島のガイドである内間祐二氏を先頭に、午前中はイシキ浜、地割製の遺構、ナカ

ムイ、フボー御嶽などを見て回り、午後からはムラウチの御殿庭、大里家、外間殿などの祭祀空間を歩いた。これらの場所では、赤嶺氏の民俗学的視点から「場所」の特性について解説していただいた。その他、島の自然環境については、自然地理学者の参加が多くみられたこともあって、海岸地形に関する見聞を広める良い機会となった。また、地域振興に関わる場所では、エラブウナギ燻製場の見学もあり、県外からの参加者を驚かせた。強風が吹きすさぶ中、午後 3 時には徳仁港より「高速船ニューくだか」に乗り、安座真港には午後 3 時 20 分に到着。10 分後には、大型バスで那覇市に向けて出発。午後 4 時 30 分にパレット久茂地前で解散した。参加者は 26 人であった。

（文責：崎浜 靖）



海岸地形を説明する前門晃会員（左）。フボー御嶽の説明をする赤嶺政信教授（右）（撮影：いずれも上江洲 薫）

2012 年度沖縄地理学会大会（報告）

沖縄地理学会・総会を、2012 年 7 月 28 日（土）午後 1 時 30 分から、琉球大学法文学部研究棟 211（地理学実験室）で開催した。大会では、7 つの研究発表（うち、口頭発表 6、ポスター発表 1）があった。以下に、その要旨を掲載する。なお、総会報告は 17～18 ページに掲載した。大会終了後、「ぱいかじ」（沖縄大前店）で懇親会を持った。

●研究発表要旨

（口頭発表 6 件）

沖縄島本部山里に分布する円錐カルストの地形形成に関する一考察

廣瀬 孝*（琉球大学）・本山 二葉（株式会社モンテローザ）・寒川 拓磨（トップツアー株式会社）・前門 晃（琉球大学）

本研究では、沖縄島本部山里に分布する円錐カルストの地形形成プロセスを明らかにすることを目的に、円錐カルストの形態と円錐カルストに発達するピナクルの割れ目に着目して調査を行った。円錐カルストの形態は、山里に発達する 22 個の円錐カルストについて、1/2,500 都市計画図の閉じた等高線の最低部を円錐カルストの底面と考え、長軸長、短軸長、長軸方向、長軸／短軸を計測した。また、山頂の標高の異なる 3 つの円錐カルスト、ユネームイ（標高 156 m）、ギマムイ（標高 202 m）、ミラムイ（標高 252 m；本部富士と呼ばれている）の山頂付近に発達するピナクルを観察すると、その形状は様々であるが、層理や節理に関係すると思われる割れ目が存在し、そのために岩盤に一定方向の面が形成されていることが確認できた。そこで、ピナクルに発達する割れ目について、その面の方向と割れ目密度の計測を行い、円錐カ

ルストの長軸方向や断層などの地質構造との関係、さらに、ピナクル周辺にある礫の大きさと岩盤の割れ目密度との関係を考察した。以上の調査から、次のような結果が得られた。1) 山里の円錐カルスト底面の長軸／短軸の値を見ると、22 個の平均は 1.7 で、また、1.5 未満は 7 個しかなく、底面形が円（長軸／短軸の値が 1）に近いものは少なかった。2) ピナクルの面の方向には、それぞれの円錐カルストで卓越する方向がいくつかあり、その一は、長軸方向と同じ方向である。3) 断層にみられる方向が、ピナクルの面の方向にもみられる。また、西北西など断層の方向のいくつかは、円錐カルスト底面の長軸方向の卓越方向とも一致している。4) ピナクルの面にみられた北の方向は、円錐カルスト長軸方向にはみられず、断層の方向にはみられた。このように、ピナクルの面の方向、円錐カルストの長軸方向、断層の方向には、共通する方向があり、それぞれに関係していることがうかがえ、円錐カルストの地形形成への関与が示唆された。

国土基盤情報数値標高モデルを利用した標高情報共有方法

渡邊 康志（沖縄 GIS 研究室）

沖縄本島中南部は沿岸に埋め立て地が広がり、多くの公共施設、商業施設、観光施設が存在し、人々が多く集まる。こうした状況で、「3.11 東日本大震災」以降、沖縄では津波に対する防災意識が高まり、県民は、特に沿岸部の高さ情報を知る手段を求めようになった。

沖縄県警は 2011 年 7 月より、標高マップを作成し pdf データとしてホームページで公開している。GIS 沖縄研究室は、2010 年 3 月より、グーグルマップで津波浸水予測図（沖縄県作成）、

2011 年 10 月より、グーグルマップで沿岸標高を公開している。その後、GISA 沖縄 2011 ワークショップで、基盤地図情報 5 m グリッド標高を利用した「フリー版 GIS を使って防災情報分析」を開催した。本研究発表は国土基盤情報数値標高モデルを利用した標高情報共有方法を紹介するものである。

1. 沿岸標高彩色図作成

国土地理院より入手可能な最も詳細な標高データは 5 m メッシュ標高データであり、基盤地図ダウンロードサービス (<http://fgd.gsi.go.jp/download/>) より入手できる。このデータから沿岸部 25 m 以下の標高値に対し、赤より緑へのグラデーションカラーによる主題図を作成する。標高データは直接 GIS ソフトにインポートできないのでデータ形式変換ツール (<http://www.gis-okinawa.jp> よりダウンロード) で変換後、フリー版 TNTmips を使って彩色処理を行った。

2. 標高データの共有

グーグルマップ・アース登場以前は、自前でサーバー (webGIS) や詳細地図データを準備する必要があり、高い費用や技術力が求められ、個人レベルで運用するのは難しかった。グーグルマップ等を利用することで、ホームページ構築能力レベルで地図情報を配信することが可能になった。具体的には標高主題図を画像情報として空間情報を記述した kml ファイルとして出力し、各自ホームページ内にアップロードすることで、公開・共有することが可能になる。例として那覇市沿岸標高分布が下記アドレスより閲覧可能である。

<http://gis-okinawa.sblo.jp/article/55783259.html>

3. 位置情報の取得と空間情報の作成

地図上で現在位置を確定することは、地図読解が苦手な人にとっては難しい作業である。現在普及しているスマートフォンには GPS が内蔵され、現在位置情報を地図 (グーグルマップ等) 上に表示し、移動経路を表示しながら記録 (kml

ファイル) することも可能である。この機能を利用することで、避難経路のシミュレーションや空間情報の集積、共有等が可能になる。

バーチャルジオツアー教材化の試み

尾方 隆幸 (琉球大学)・藤田 智子 (琉球大学・学)

伊江島で行われた野外巡検を中学生向けのジオツアーにアレンジし、さらにバーチャル化して学校教育の教材として活用することを試みた。ベースになった野外巡検は、2012 年 6 月 17 日に琉球大学と筑波大学の学生 15 名を対象に「水文学的ジオサイトとしての伊江島」のテーマで実施された。本部港に集合し、伊江島に渡って城山 (たっちゅー) と湧出 (わじい) を巡り、本部港に戻って解散するルートである。現地では、基盤岩のチャートの観察、海成段丘の地形と堆積物の観察、水循環と土地利用の考察などを行った。サイトどうしの結びつきを重視し、さまざまな地理学的要素が関連しあって地域の自然環境を作り上げ、さらにそれが人間活動の基盤になっていることをストーリーとして組み立てた。

この巡検をアレンジしたバーチャルジオツアーは、琉球大学教育学部附属中学校において、7 月 10 日 (3 年生 17 人対象)、7 月 11 日 (1 年生 16 人対象)、7 月 12 日 (2 年生 16 人対象) に実施された。タイトルは「ジオパークから地球をみよう！」とした。講義は、ジオパークの簡単な解説、バーチャルジオツアー、水循環の模型実験の順に進められ、講義後には理解度と興味度を問うアンケート調査を実施した。

バーチャルジオツアーでは、要所をスライド (静止画像) で提示し、ルートをトレースして紹介していく方法をとった。全コースをトレースした後、地形模型を用いて段丘の景観を触覚で確認する作業をさせた。さらに、水循環のメカニズムを模型実験でデモンストレーションし

た。模型は、粘土を用いた不透水層と、その上位に濾過材を乗せて固定した透水層からなる。この模型に着色した水を降らせ、降水が地中に浸透し、地下水流となり、段丘崖の不整合面から湧出する水循環の機構を再現した。

アンケート結果は以下ようになった。理解度については、「よく理解できた」と回答した生徒は 1 日目 2 人、2 日目 2 人、3 日目 6 人で、「だいたい理解できた」と回答した生徒は、それぞれ、7 人、9 人、8 人であった。両者をあわせると、それぞれ 9 人、11 人、14 人の生徒が理解できたと回答している。興味度については、「たいへん興味を持った」と回答した生徒は 1 日目 3 人、2 日目 3 人、3 日目 6 人で、「興味を持った」と回答した生徒は、それぞれ、10 人、12 人、10 人であった。両者をあわせると、それぞれ 13 人、15 人、16 人の生徒が興味を持てたと回答している。今後は動画を取り入れるなどして、生徒がより現地を実感できるよう工夫したい。

漁民のサンゴ礁漁場認識

地名を手がかりに

渡久地 健 (琉球大学)・西銘 史則 (株式会社
沖縄環境分析センター)

今から 35 年前の 1977 年に、南城市知念の漁民・太田徳盛氏の手によって自らの漁場の地名図が作られた。そこにはおよそ 200 の地名が記載されてある。縁あって、この地名図を分析することになった演者らは、まずは地名図に記された地名語彙を整理し、一つ一つの地名の意味を解明することをめざし、その海に詳しい漁民からの聞き書きを重ねてきた。

南城市知念のサンゴ礁は、沖縄島のなかで最も幅広いサンゴ礁の一つであり、広大なイノー(浅礁湖)には多様な微地形がみられ、その微地形を巧みに利用した網漁など、さまざまな漁撈

活動が営まれてきた。地名語彙を分析した結果、全体の 3 分の 2 の地名に語基として地形語が組み入れられていることがわかった。その地形語彙は、未詳語を除いても 30 を超えている。

地名の接頭辞として最も多いのは、「陸上地名」ではなく海のなかの「周辺地名」であった。他の地域では陸上地名を海に延長して名づけが施されている割合が比較的高いが、南城市では、サンゴ礁の海にある「周辺地名」から分岐・派生して命名された地名が最も多く全体の約 21%にも及んでいる。広大なサンゴ礁空間では、そのような命名法による地名形成が有効であったと考えられる。

※ 本発表の一部は、大田氏の遺族の許可を得てつぎのとおり発表した。渡久地健・西銘史則(2013):「漁民のサンゴ礁漁場認識——大田徳盛氏作製の沖縄県南城市知念『海の地名図』を読む」、『地理歴史人類学論集』第4号, pp. 77-102, 琉球大学法文学部発行。

架橋および空路に対する住民意識

沖縄県伊平屋村野甫島住民の事例

堀本 雅章 (法政大学沖縄文化研究所)

架橋により便利になる一方、島外からの自由な来訪による環境の悪化が指摘されることが多い。本研究では、沖縄県伊平屋村野甫島を対象に、架橋および空路に対する意識について調査を実施した。研究目的は、野甫島と伊平屋島との架橋および野甫島と伊是名島との架橋の賛否およびその理由を分析し、差異がみられるのか否か、さらに空路の必要性の有無およびその理由を解明することである。野甫島は、伊平屋島と 1979 年に野甫大橋で結ばれた面積約 1.06 km²、人口約 100 人の島である。野甫大橋を利用し伊平屋島にある役場、農協、漁協、学校等に通勤する者がいる一方、野甫小中学校教職員、農業、漁業、製塩業、売店、伊是名島間の渡し船、民宿を営む者など島内での就業者もいる。

調査は、2011 年 8 月下旬から 9 月上旬に、68 人の全成人を対象に実施し、58 人から回答を得た。主な質問項目は、「野甫大橋は必要か否か」、「仮に伊是名島と架橋される話があった場合、橋は必要か否か」、「空港は必要か否か」およびそれぞれの理由（複数回答可）である。

野甫大橋については、回答者全員が必要とし、その理由のほとんどは便利になったからである。橋を利用して伊平屋島への通勤者が多いだけでなく、役場、診療所、郵便局、幼稚園、保育所、農協、漁協、比較的大きなスーパー、飲食店などは伊平屋島にしかないからである。橋は不要との回答者は全くいないが、野甫住民と伊平屋住民とはほとんど顔見知りで、沖縄本島から伊平屋島への訪問者も限られ、島外からの来訪者による環境の悪化は考えにくいからである。次に、野甫島と伊是名島との架橋については、必要 38 人、不要 15 人、両方に回答 2 人、できる可能性はない、分からない、無記入各 1 人である。橋が必要な理由は、便利になる、観光客が増える、経済効果、伊平屋村と伊是名村の合併・空港建設につながるなどである。一方、橋が不要な理由は、環境破壊、治安の悪化で、伊平屋島との架橋とは異なる結果となった。空港については、必要 21 人、不要 33 人、分からない 4 人である。便利になる、船は欠航しても空路は運航される場合があるなど肯定的な意見がみられた一方、環境の悪化や必要性がないなどの回答も多くみられた。後者の理由として、対岸の沖縄本島の港に車をおいて移動するケースや、高速道路、高速バスの運行など陸路の整備があげられる。

※ 本発表の一部は、「沖縄県野甫島住民の日常生活空間と架橋の賛否に対する住民意識」と題して、『沖縄地理』第 12 号 pp. 33-44（2012 年 6 月発行）に掲載された。



地域社会における植物資源利用の 歴史的ダイナミズム

南西諸島におけるソテツ利用を中心に

金城 達也（北海道大学・院）

植物としてのソテツ類（Cycadopsida）は世界中の熱帯・亜熱帯地域に分布しており、それぞれの地域において多様な利用の仕方がみとれるとともに、地域社会独自の文化を育んでいる（John, 2003; Pérez and Vovides, 2006）。

そうしたなか、一部の地域ではソテツそのものが絶滅の危機に瀕していたり伝統的な知識基盤が侵食されつつあったりするなど、地域によって起こっている問題も一様ではない（Bonta, M, *et al.*, 2006）。一方で、形態に若干の変化はあるにせよ、南西諸島などでは現在でもソテツを利用した営みが行われていることも少なくない。

本報告では、南西諸島におけるソテツ利用の歴史的ダイナミズムを明らかにし、どのような社会関係のもとでソテツとの関係性が継続されてきたのかを検討した。また、現在の利用形態からソテツ利用を捉えなおすことで、地域社会の生活戦略における自然資源の位置づけを明らかにすることも目的のひとつとした。なお、本報告では南西諸島におけるソテツ利用を調査対象にしたが、そのなかでも特に、奄美群島に属する徳之島の事例を中心に論を展開した。

南西諸島におけるソテツ（*Cycas revoluta*）の利用をめぐるのはこれまで、飢饉時等の救荒作物として捉えられるのが一般的であった。しかし、徳之島では地域内交易などにも利用されるなど、生活戦略の一部として利用されてきた。また、現在の状況からソテツ利用を捉えなおしてみると、地域社会における主要な生業を支える二次的な生産物のひとつとして重要な役割を果たしていることが明らかになった。そこではまた、生産—流通—消費をめぐるさまざまな

相互行為が展開されている。

地域社会における生計戦略をはじめ、利用をめぐる諸問題、さらには自然資源管理や地域環境（あるいは地球環境）保全まで、多岐にわたる利用のされ方がなされるとともに、複雑な社会関係のもとでソテツとの関係性が継続されている。

参考文献

- Bonta, M., O. F. Pinot, D. Graham, J. Haynes and G. Sandoval (2006): Ethnobotany and Conservation of *Tiuseinte* (*Dioon mejiae* Standl. & L. O. Williams, *Zamiaceae*) in Northeastern Honduras. *Journal of Ethnobiology*, 26(2): 228-257.
- Donaldson, J.S.(ed.)(2003): *Cycads*, World Conservation Union.
- Pérez-Farrera, M. A. & A. P. Vovides (2006): The ceremonial use of the threatened “*espadaña*” cycad (*Dioon merolae*, *Zamiaceae*) by a community of the central depression of Chiapas, Mexico. *Bol. Soc. Bot. Méx.* 78:107-113.

関連論文

- 金城達也・寺林暁良（2013，印刷中）：「徳之島におけるソテツ景観の意味——生業活動の組み合わせとその変遷から」、『北海道大学大学院文学研究科研究論集』12
- 金城達也・寺林暁良（2013，投稿中）：「徳之島の生業複合から『ソテツ地獄』を問いなおす——構築された歴史観と地域社会の歴史認識のズレ」、『地域文化論叢』

（ポスター発表 1 件）

近代先島諸島におけるマラリア有病地 歴史 GIS による空間表現

崎浜 靖（沖縄国際大学）・鈴木 厚志（立正大学）

1. 研究のねらい

20 世紀前半の先島諸島において、年間 1000 人から 2000 人のマラリア患者の発生が報告されている。そもそも、マラリア媒介蚊であるコガタハマダラカは、水たまりや水田が形成されやすい湿地帯を好み、こうした地理的環境を有する地域が有病地となった。本研究では、20 世紀前半の先島諸島におけるマラリア有病地の地理的環境を、高精度 DEM と旧版地形図や

史料を組み合わせることで復元し、土地利用や集落形態との関係から考察を行った。

2. 研究方法

本研究では、まず先島諸島の地形別の島分類を行い、表層地質と土地利用との関係、各島嶼の地形別面積を比較した。続いて、20 世紀前半の宮古島におけるマラリア罹患率を算出し、集落別人口推移を検討した。地形表現には 10 m 間隔の DEM を使用し、これにより宮古島の地理的環境を復元した。マラリア有病地の事例としては、宮古島の東海岸中央部に位置する東仲宗根添集落を取りあげ、5 万分の 1 地形図（1921 年）や表層地質図（1977 年）などから土地利用状況を明らかにし、それらの幾可補正により高精度 DEM 上に表示した。その一部は水系図とともに 3 次元視覚化を試みた。

3. まとめ

本研究の分析結果は以下の通りである。

① 宮古島は礫性の石灰岩が表層の 90% を覆う「低島」であるが、粘土質堆積物が表層を覆い、かつ断層地形の影響を受けた凹地にはマラリア有病地が複数存在した。

② 事例地域とした東仲宗根添には小河川もあり、表層地質の影響から水の溜まりやすい環境であった。加えて大野山林を中心とする森林の存在により、島内最大のマラリア有病地が形成された。住民は、このような土地の周囲にある微高地に、5 から 10 戸程度の集落または散居に生活した。

③ 20 世紀前半の粟作中心の島内にあって、事例地域の東仲宗根添集落は水利条件にも恵まれ水田耕作も展開した。しかし、マラリア媒介蚊の蔓延する土地ゆえ、その開発は容易ではなく、生活環境や労働条件の制約により原野や切替畑のような劣等地が多く分布した。宮古島住民の多くは、このような土地を「異界」と認識し、開発が永く阻害された。

一枚の図で語る地理トピック # 04

駐留軍用地跡地の利用形態と観光開発の推進

上江洲 薫（沖縄国際大）

第二次世界大戦後、沖縄県、特に沖縄島ではアメリカ軍施設の整備に伴い、住民の生活基盤である土地が強制収容された。その後、徐々に返還される土地が増加しているが、今なお広大な土地がアメリカ軍の基地に使用されている。その一方で、軍用地料を主な収入源とする地主やアメリカ軍施設で働く基地従業員がいるなど、基地経済は軍用地の返還を遅らせる一つの要因にもなっている。また、実際に返還された基地の跡地利用が進展しないなどのいくつかの課題がある。返還された土地の中には跡地利用計画が比較的に進展した跡地がある一方で、進展しない跡地がある。

跡地利用の特徴は、「都市的土地利用」、「農業的土地利用」、「観光的土地利用」などに分ける事ができる。都市的土地利用をみると、那覇市の「那覇空軍海軍補助施設」や「牧港住宅地区」、北谷町の「ハンビー飛行場」、沖縄市の「泡瀬通信施設」、旧具志川市の「天願通信所」などの跡地では商業施設や住宅街などが広がっている。農業的土地利用をみると、市街地化されていない農村部や離島にみられる。本部町の「上本部飛行場」、伊江村の「伊江島補助飛行場」などの返還用地の一部で農業用に利用されている。また、観光的土地利用も多く見られる。農村地域でも跡地利用が限られているため、まとまった土地に観光施設を誘致して地代を得ることを目的する場合がある。例えば、旧玉城村の「知念補給地区」、糸満市・旧具志頭村の「南部弾薬庫」、読谷村の「ボローポイント射撃場」などでは跡地の一部でゴルフ場やホテル

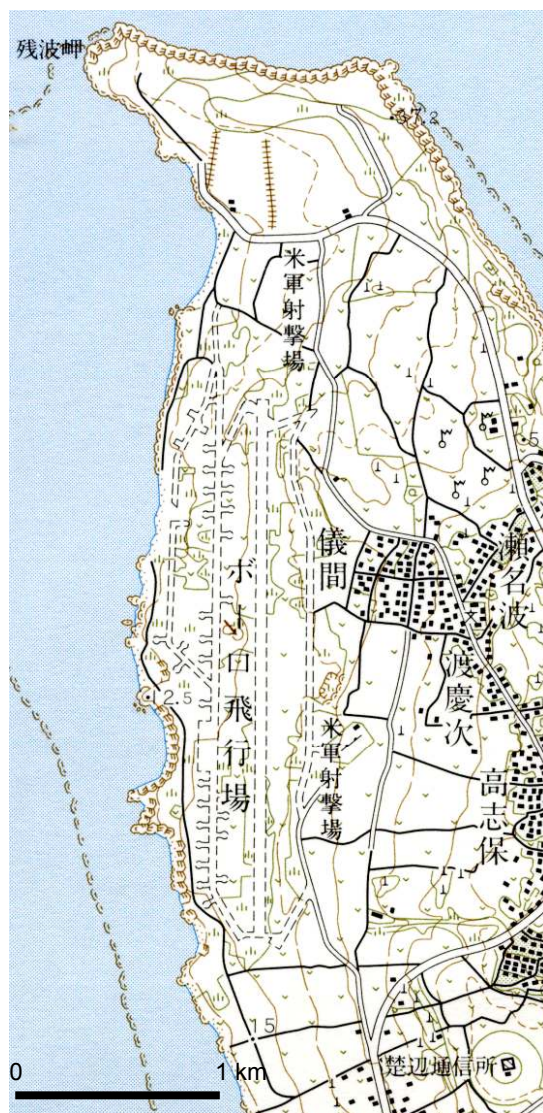


図 1 返還前のボローポイント射撃場付近
1:50,000 地形図「沖縄市北部」(昭和 50 年編集)
(編集子注: 図を 150% 拡大。スケールは編集子による)

などの観光施設が開設されている。

図 1 は返還前の読谷村のボローポイント射撃場である。この駐留軍用地は、1945 年の米

軍上陸後に本土爆撃用の飛行場として建設され、戦後、戦車の砲撃演習場や戦闘機の射撃、銃撃演習地などとして使用された。射撃場一帯には儀間、宇座、国吉、崎原の4集落が立地していたが、射撃場建設に伴い村内の他の地域に集落の移転を強いられた。1972年の沖縄の本土復帰頃には演習が減少して射撃場は遊休化していた。その後、1974年に高志保地区や儀間地区の大半（ボローポイント射撃場の南地区）、残波岬付近（北地区）、1976年に儀間付近（中地区）が返還された。

読谷村では、残波岬一帯と渡慶次・儀間海岸地域の2カ所のリゾート開発に対し、開発業者・地主会・村当局などが協議を重ねて取り組んできた。読谷村当局は、返還軍用地の跡地利用として、2カ所のリゾート開発を村づくり、また、土地利用構想の実現の一環として、さらに返還軍用地の一括利用や地代収入などを目的に、規制と誘導を行いながら取り組んできた。

具体的にはリゾート開発の誘致に当初から関わり、計画段階から海浜整備のあり方や入浜権（海岸の囲い込み）の問題、地元雇用の創出、地元の産品や業者の活用などについて、地主会や地域住民、開発業者などと協議を重ね地域の活性化や共存共栄を目指した開発を進めたのである。

現在では、「沖縄残波岬ロイヤルホテル」や「ホテル日航アリビラ」などのリゾートホテルや菓子の製造販売を行う「御菓子御殿」、テーマパークの「むら咲むら」、「残波ゴルフクラブ」などの観光施設、また、リゾートウェディングに利用される教会などが、残波岬や海岸沿いに集積している。

ボローポイント射撃場の跡地以外にも、読谷補助飛行場跡地には、読谷村役場や陸上競技場、読谷ファーマーズマーケットなどが整備されるなど、跡地利用が村づくりの一環として進められ、今後の発展が期待されている。

沖縄地理学会のロゴマークを決定

沖縄地理学会30周年に向けて企画された、ロゴマークの作製について、公募を行った結果、7名（計12点）の応募があり、幹事会で慎重に協議を行いました。その結果、琉球大学教育学部学生の朝久陽奈子さんの応募作が特賞に選ばれました。



特賞の受賞作は、専門家（琉球大学教育学部の美術のティトウス先生）にポリッシュアップを依頼し、それを幹事会で検討してロゴマークが完成いたしました。（文責：廣瀬 孝）

〈特賞〉1名（副賞：図書カード30,000円）

・朝久 陽奈子（琉球大学教育学部学生）

〈佳作〉3名（副賞：図書カード10,000円）

・比嘉 美咲（琉球大学教育学部学生）
・大崎 靖史（東京都東大和市イラストレーター）
・佐々木 芽衣（琉球大学教育学部学生）

〈特別賞〉3名（副賞：図書カード3,000円）

・平川 由葵（沖縄尚学高校学生）
・荷川取 唯花（琉球大学教育学部）
・渡久地 健（琉球大学法文学部）

前門 晃会長から賞状を受け取る朝久さん

2012年7月26日（廣瀬 孝撮影）

● 沖縄地理学会「新ホームページ」への移行に関して

渡邊 康志 (HP 担当幹事 ; GIS 沖縄研究室)

沖縄地理学会のホームページは平成 24 年 11 月より新ページに移行しました。アドレスは <http://www.okinawachiri.sakura.ne.jp> となります。旧ホームページは琉球大学サーバー内に置かれ、学外からの更新に制限がありました。さらに、ホームページ管理に精通していた幹事の移動により、約 4 年間更新が行われておりませんでした。そこで、新ホームページは担当者の交代や所属変更でも更新に支障をきたさないよう、一般のウェブサーバーを利用したの再出発となりました。

コンテンツは高度な機能は使わず、新情報の発信と情報の pdf 文書蓄積を重点に進めたいと考えております。これにより更新作業を軽減でき、担当者交代時の混乱などを少なくできるものと考えます。

ホームページ内の連絡先には個人メールアドレスは不使用といたしました。このドメインよりメールアドレス発行が可能なので、メール転送機能を併用して、学会へのメールは担当者へ自動転送されるようになっていきます。例えば info@okinawachiri.sakura.ne.jp に送られたメ

ールは幹事全員に転送される設定になっています (転送先は今後調整いたします)。

以上、新ホームページの概要と変更点を担当者より報告させていただきました。

【お願い】

旧ホームページは大学サーバー内にあり、現在のところ新ページへのジャンプを設定できない状態が続いております。そのため、新ホームページはグーグルなどの検索にて上位に表示されておりません。当学会の情報を会員・非会員に広めるためには検索にて上位に現れることが望ましいと考えております。そこで会員みなさまの関連機関ホームページで沖縄地理学会へのリンクがある場合、早急にアドレスを新ホームページアドレスに変更していただきたいと思います。よろしくお願いします。

(編集子付記) 以上は、編集子が渡邊氏に執筆を依頼した文章です。今後、ホームページのコンテンツをより充実させていきたいと考えています。当面、学会誌『沖縄地理』の総目次、「会報」のバックナンバーの掲載などを計画しています。ご期待ください。

● 2012 年度 沖縄地理学会例会(報告)

表記例会を、2012 年 12 月 26 日 (水) 午後 6 時、琉球大学法文学部研究棟 211 地理学実験室で開催した。発表者は会員の西岡尚也氏 (大阪商業大学総合経営学部)、演題は「地理教育と開発教育の係——これまでの私の経験から」。参加者 18 人。出席者に西岡さんのご著書『子どもたちへの開発教育——世界のリアルをどう教えるか』(ナカニシヤ出版、2007 年発行) がプレ

ゼントされた (先着 10 人)。

地図帳を上手に使った授業との出会いなど、西岡氏ご自身のこれまでの地理学への道、地理教育の歩みを振り返りつつ、氏が尊敬する内村鑑三・吉田松陰・マザーテレサ・藤岡健次郎などの思想を俎上にのせながら、リアリティのある開発教育の在り方について持論を展開され、感銘深かった。(文責：編集子)

2012 年度総会(報告)

2012 年 7 月 28 日(土), 琉球大学法文学部研究棟 211(地理学実験室)で開催された 2012 年度総会は, 会員多数参加のもと, 崎浜 靖会員の司会で進められ, 堀本雅章会員を議長に選出した。2011 年度事業報告, 2012 年度事業計画, 2011 年度会計報告, 2012 年度予算案が示され承認された。また, 2012・2013 年度の役員が全会一致で選出された。

■ 2011 年度事業報告

1. 大会・総会

2011 年 7 月 30 日(土)沖縄大 2-306 教室。一般発表 5 件, ポスター発表 2 件, 参加者約 40 人。

2. 第1回石灰岩地域シンポジウム。参加者約 80 人。

2011 年 7 月 30 日(土)沖縄大 2-306 教室

テーマ:石灰岩地域を知る最初の一步

オーガナイザー, 司会 前門 晃(琉球大学)

基調講演:上原 富二男(沖縄大学):石灰岩地域の自然と人

パネリスト 上原 富二男, 名城 敏(沖縄国際大学), 我那覇 念(沖縄県立浦添高校), 田代 豊(名桜大学)

コメンテータ 廣瀬 孝, 上江洲 薫, 尾方隆幸

懇親会(味亭和)17 時 30 分から, 参加者 20 人。

3. 第 7 回地理教育公開シンポジウム(沖縄県教育委員会の後援), 参加者 85 人

2011 年 9 月 10 日(土)沖縄国際大 7-201 教室
全体テーマ:「これからの地理教育が進む方向」

基調講演:松井秀郎(立正大学・前文科省教科書主任調査官), 演題「テーマ:小・中・高学習指導要領における地球儀・地図の指導について——地理教育はどんな方向に進むのか」

パネリスト

稲嶺 保(嘉手納町立屋良小学校), 小泉邦彦(西宮市立上甲子園中学校), 仲田邦彦(沖縄県立南風原高校)

オーガナイザー, 司会 西岡尚也(琉球大学)

懇親会(ばいかじ沖国大前店)で午後 6 時から。参加者 25 名

4. 巡検

開催日:3 月 3 日(土)10 時~17 時, 参加者 25 人

テーマ:ジオサイトをいかに解説するか

案内者:田代 豊(名桜大学)・千村次生(中央開発)・尾方隆幸(琉球大学)

主なコース:本部カルスト(本部富士)→山里地区のドリーネ, 大堂地区のポリエ, 嘉津宇地区のウバーレ

5. 例会

第 1 回沖縄地理学会例会報告

日時:2011 年 9 月 26 日(月)18:30~20:00, 琉球大学法文学部研究棟 211 地理学実験室, 参加者 8 人

発表者:高屋康彦(東京大学空間情報科学研究センター客員研究員)

演題:岩石の風化に及ぼす地質と環境条件の影響

6. 『沖縄地理』第 12 号の発行(2012/06/25)

7. 「沖縄地理学会会報」第 55 号(2012/02/29), 第 56 号(2012/06/29)の発行

8. 評議員会

2012 年 7 月 20 日(金)琉球大法文学部研究棟 211 地理学実験室で開催

9. 幹事会

ほぼ 2 ヶ月に一度の頻度で, 琉球大法文学部研究棟 209 教室で開催

■ 2012 年度事業計画

1. 大会・総会

2012 年 7 月 28 日(土): 13:00~17:00, 琉球
大学法文学部 研究棟 211(地理学実験室)

懇親会: ばいかじ沖国大前店

2. 沖縄地理学会 30 周年記念事業「公開シンポジ

ウム(案)」日時: 12 月 8 日(土) 13:00~17:00,
会場: 沖縄国際大学 5 号館 107 教室, テーマ:
(仮題) 琉球弧における地理学の成果と課題, 基
調講演: 堂前亮平(久留米大学): 沖縄における
人文地理学の歩み(仮題)

パネリスト候補, 自然: 前門 晃(琉球大学), 島津
弘(立正大学), 人文: 宮内久光(琉球大学), 中村
倫子(沖縄県南部農林土木事務所), 地理教育: 我
那覇 念(沖縄県立浦添高校), GIS: 鈴木厚志(立
正大学)など

コメンテータ: パネリスト以外の会員から検討

司会: 広瀬 孝(琉球大学)

(共催) 立正地理学会 (後援) 沖縄国際大学, 懇
親会: ばいかじ沖国大前店

3. 県内巡検

日程: 12 月 9 日(日), テーマ: (仮題) 久高島の
祭祀空間と地域振興, 久高島までの移動ルー

ト, 案内者: 赤嶺政信(集会幹事で調整してもらう),
前門 晃, 崎浜 靖, 上江洲 薫, 小川 護, 地
元区長さんなど

4. 例会

集会幹事のほうで検討, 調整する

5. 『沖縄地理』第 12 号の発行

6. 「沖縄地理学会会報」第 57 号, 第 58 号の発行

7. 例会

琉球大法文学部研究棟 211 地理学実験室で
開催

8. 幹事会

2 ヶ月に一度の割合で琉球大法文学部研究棟
209 教室で開催

■ 2012・2013 年度役員

会長: 前門 晃

会計監査: 中村倫子・森山 靖

評議員: 上江洲 薫・上原 富二男・尾方隆幸・小
川 護・崎浜靖・知念美佐子・渡久地健・仲田
邦彦・中村謙太・廣瀬 孝・福永 忍・町田宗
博・宮内久光・渡邊康志

幹事: 上江洲 薫・尾方隆幸・小川 護・崎浜 靖・
渡久地 健・廣瀬 孝・渡邊康志

● 2013 年度沖縄地理学会大会について（予告）

2013 年度沖縄地理学会大会は、2013 年 7 月 27 日（土）、琉球大学法文学部新棟 215 教室で開催します。午前に一般研究発表（口頭発表／ポ

スター発表）を、午後に第 2 回石灰岩地域シンポジウムを予定しています。



国木田独歩に『忘れ得ぬ人々』という短い小説がある。忘れ得ぬ人々とは、お世話になって恩義を感じなければならない人、つまり「忘れてかなうまじき人」ではなく、旅先などで出会った人々——いや出会った人というよりはむしろ、旅の風景のなかに佇む、現在の自分とは何の関係もない他人、長い一生の中でのたった一度きりの人であり、自分のその後の行路に何ら影響を及ぼしたわけでもないにもかかわらず、何かの拍子で思い出され、記憶の中から消えない人々……。

私にとって「忘れ得ぬ人々」の一人は、二度目の奄美大島の一離島の調査において友人と二人で泊まった A 集落の民宿 Y の老婆である。最初の調査のときには A 集落の民宿 X に泊まった。A 集落には民宿が 2 軒あるが、二度目の訪問では、最初に泊まった民宿 X を予約するつもりが、間違って民宿 Y を電話予約してしまった。多くの民宿の例にもれず、民宿 Y も朝・夕食が付いていたが、食事はお膳に乗せられて部屋に運ばれてくる。客はわれわれ二人だけ。80 歳を越えていると思われる華奢なお婆さんが食事を運んでくる。2 日目の朝、「昨夜は眠れましたか？」という「久しく爺さん

が寝込んでいて昨夜は咳がひどくて、すみませんでした」。「いいえ、よく眠れましたよ」。「島には何をしたいらっしゃいました？ 観光ではなさそうですね」。「ええ、海の調査です。サンゴ礁の魚や貝の……」。その日の朝食には、島の磯で採れるトコブシと呼ばれるアワビの仲間（ミミガイ科）の料理が乗っていた。老婆は、急に子どものような表情を浮かべ、「ああ、海ですか、貝の調査ですか。そうだったのですか」という、「じつは私も貝を集めているのですよ」。「どんな貝ですか？」と訊くと、「私の貝を見ていただけますか？ ちょっと待ってくださいね」といって部屋を出て行った。数分後に、大きな紙箱を二つ抱えて戻ってきた。

脱脂綿を敷き詰めた箱の中にはさまざまな貝が整然と並べられ名前も記されている。和名の書かれてない貝を指して、「これはまだ名前を調べていません。落ちていたら図鑑で調べて書きます」という。小さな巻貝を指して「この貝は、島の方言では何といいますか」と訊ねると、「方言 ?!」と小さくつぶやいた。方言名も大切です、とはさすがにいえなかった。「袋に入った貝殻もたくさんあるのですよ。いまは爺さんの世話をしないといけないからできませんが、手がかからなくなったら整理したいと思っています」。

小島の集落の前面に広がる白い砂浜。そこから長年、拾い集められた無数の貝殻。お婆さんの、かけがえない貝の世界。一つ一つに思い出が詰まっているに違いない貝の箱。貝が集められた渚という小空間。この老婆の、貝をめぐる渚の生活世界を描くことはできるだろうか。（前号訂正： #03 → #02）

● 会員の受賞／表彰 ●

● 本会報（56 号、10 ページ）で紹介した『ぎのわんの地名——内陸部編』が、2013 年 1 月に、第 33 回沖縄タイムス出版文化賞（特別賞）を受賞しました。＊本書には会員の崎浜 靖さんと上原 富二男さんが参加しています。

● 会員が関わった本 ● ● ● ●

事務局に寄せられた会員が関わった刊行物を紹介いたします（順不同）。今後とも、刊行物の画像データとともに書誌情報のご提供をお願いいたします。

● 野澤秀樹・堂前亮平・手塚 章 [編]:『日本の地誌 10

九州・沖縄』、朝倉書店、2012/12/05 発行、大型本（27.6 × 20.6 cm）、656 ページ、26,250 円。＊会員の執筆者は、堂前さん（編者）のほかに、崎浜 靖さん、上江洲 薫さん、小川 護さん、前門 晃さん、廣瀬 孝さん、宮内久光さん、石川友紀さんの 7 名。高価な本で個人での購入は難しいと思いますが、大学図書館、市町村史事務局などに購入してもらえるかもしれません。

● 町田宗博・金城宏幸・宮内久光 [編]:『躍動する沖縄系移民——ブラジル、ハワイを中心に』、彩流社、2013/03/31 発行、B5、293 ページ、3,000 円。会員の町田さん（編者）、宮内さん（編者）、名誉会員の石川友紀さんが執筆しています。

● 小泉武栄 [編]:『図説 日本の山——自然が素晴らし



い山 50 選』, 朝倉書店, 2012/05/02 発行, B5, 166 ページ, 4,200 円。*会員の尾方隆幸さんが「男体山・日光白根山」(pp. 70-73)を執筆しています。

● HGIS 研究協議会 [編]:『歴史 GIS の地平——景観・環境・地域構造の復原に向けて』, 勉誠出版, 2012/03/30 発行, B5, 288 ページ, 4,200 円。*会員の尾方隆幸さんが「古事類苑・地部 GIS データの作成」(pp. 69-78)を執筆しています。

● 我部政明・石原昌英・山里勝己 [編]:『人の移動, 融合, 変容の人類史——沖縄の経験と 21 世紀への提言』, 彩流社, 2013/03/15 発行, B5, 415 ページ, 4,000 円。*会員の廣瀬 孝さん, 町田宗博さん, 渡久地 健さんが執筆しています。

● 田原字誌編集委員会 [編]:『田原字誌』, 字田原財産管理運営会, 2012/10/20 発行, B5, 525 ページ。*会員の渡久地 健さんが「田原の自然」(pp. 13-39)を執筆。

活動日誌

▼2012/03/07(水) 2011 年度第 5 回幹事会 (琉球大学法文学部研究棟 209 室, 18:30~) 議題:①会報 55 号の発行/②ロゴマーク/③2012 年度の大会/④30 周年事業/⑤本部巡検の報告/⑥『沖縄地理』12 号

▼2012/03/29(木) 2011 年度第 6 回幹事会 (琉球大学法文学部研究棟 209 室, 16:00~) 議題:①30 周年事業/②ロゴマーク(応募作品の審査)

▼2012/04/26(木) 2011 年度第 7 回幹事会 (琉球大学法文学部研究棟 209 室, 18:30~) 議題:①『沖縄地理』12 号/②ロゴマーク(特賞作品のポリッシュアップ状況)/③2012 年度の大会/④30 周年事業

▼2012/06/07(木) 2011 年度第 8 回幹事会 (琉球大学法文学部研究棟 209 室, 18:30~) 議題:①2012 年度の大会/②『沖縄地理』12 号/③ロゴマーク/④30 周年事業/⑤会報 56 号

▼2012/06/25(月) 『沖縄地理』(第 12 号)発行

▼2012/06/29(金) 「沖縄地理学会会報」(第 56 号)発行

▼2012/07/12(木) 2012 年度第 1 回幹事会 (琉球大学法文学部研究棟 209 室, 18:30~) 議題:①2012 年度大会・総会の準備状況(総会議題の準備, 役員改選の準備など)/②『沖縄地理』12 号の発行/③ロゴマークの決定/④30 周年事業/⑤会報 56 号の発行

▼2011/07/20(金) 第 32 回沖縄地理学会評議員会 (琉

球大学法文学部研究棟 211 室, 18:30~) 議題:①2011 年度活動状況報告/②2011 年度決算/③会員の入会・退会/④2012 年度総会・大会(2012 年度事業計画, 2012 年度予算, 大会発表申込, 大会プログラム発送)/⑤役員改選の準備

▼2012/07/28(土) 沖縄地理学会・総会 (琉球大学法文学部研究棟 211 室)。

▼2012/9/18(火) 2012 年度第 2 回幹事会 (琉球大学法文学部研究棟 209 室, 18:00~) 議題:①幹事の役割/②30 周年事業/③県内巡検/④IGU 京都地域会議の政治地理委員会セクション案, ⑤沖縄巡検案。

▼2012/11/26(月) 2012 年度第 3 回幹事会 (琉球大学法文学部研究棟 209 室, 18:30~) 議題:①沖縄地理学会創立 30 周年記念シンポジウム, ②2012 年度第 1 回沖縄地理学会巡検の準備状況, ③新 HP の開設。

▼2012/11/08(木) 沖縄地理学会の新 HP を開設

▼2012/12/08(土) 沖縄地理学会創立 30 周年記念シンポジウム (沖縄国際大学 5 号館 107 教室, 12:50~), 立正地理学会沖縄例会との共催, 参加者 130 人。

▼2012/12/09(日) 2012 年度第 1 回沖縄地理学会巡検。「久高島の祭祀空間と地域振興」のテーマに, 立正地理学会臨地研究会との合同の形で実施。参加者 26 人。

▼2012/12/26(水) 2012 年度第 2 回沖縄地理学会例会 (琉球大学法文学部研究棟 211 室)。講師:西岡尚也(大阪商業大学総合経営学部), 演題「地理教育と開発教育の連係——これまでの私の経験から」。参加者 18 人。

▼2013/01/22(月) 2012 年度第 4 回幹事会 (琉球大学法文学部研究棟 209 室, 18:30~) 議題:①30 周年公開シンポ報告, ②第 1 回県内巡検報告, ③第 1 回例会報告, ④会報 57 号編集進捗状況, ⑤第 2 回県内巡検開催, ⑥ HP 開設, ⑦沖縄地理 13 号原稿募集, ⑧学会表彰規定

▼2013/04/08(月) 2012 年度第 5 回幹事会 (琉球大学法文学部研究棟 211 室, 18:30~) 議題:①第 2 回県内巡検中止について, ②HP 活用状況と掲載コンテンツ, ③沖縄地理 13 号原稿締切の延長について

▼2013/05/08(水) 2013 年度第 1 回「沖縄地理」編集委員会 (琉球大学法文学部研究棟 209 室, 18:30~) 議題①「沖縄地理」13 号の編集, ②応募原稿の査読

▼2013/05/20(月) 2012 年度第 6 回幹事会 (琉球大学法文学部研究棟 211 室, 18:30~) 議題:①会務の報告, ②総会・大会の準備, ③その他

▼2013/05/20(月) 「沖縄地理学会会報」(第 57 号)発行

【編集後記】今号も発行が大幅に遅れました。深くお詫び申し上げます(渡久地健)。2012 年度は沖縄地理学会創立 30 周年で, 記念シンポジウムの開催, ロゴマークの完成, 堂前亮平さんほか本学会の会員 7 人が執筆した『日本地理 10 九州・沖縄』の刊行, 渡邊康志さんのノウハウとご尽力による「新ホームページ」の開設など実り多い年度となりました。シンポジウムでは沖縄における地理学研究成果と課題がテーマとなりましたが, これと関連する雑誌記事として, 小川 護さんが執筆されている「沖縄における地図学・地理学(学会)活動と地図活用の実際」(『地図中心』485 号)があり, 参考になります。(と)